

---

# ストロベリーパフェ

いちご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストロベリー・パフ

### 【Zコード】

Z4961A

### 【作者名】

こじか

### 【あらすじ】

高校2年生の藍梨は、最近バスの中で出会った“彼”的事が気になるようになつた。これが恋なのかわからないけど、何かキラキラしているキレイなものを見つけた気がした。

## 涙のチャーチルペーパーと、彼との出逢い（前書き）

初めて書く小説なので、まだまだわからないことだらけですが、高校生のピュアな恋愛を書けたらいいなあと思っています！！

## 涙のチラリートパフュム、彼との出来事

「う、えーん…藍梨【あいり】…」

結希【ゆき】がすうじい顔で泣いている。

「…、あたし達が学校帰りによく寄つ道をしてくる喫茶店。

結希の泣き顔に店のお姉さんがこいつを見た。

「うわっ…恥ずっ…」

あたしは内心そつ思つたけど、口には出せなかつた。

結希はと書つと、そんな事には全く気付いてないみたいで、泣きながら大好きなチョコレートパフュムを頬張つている。

結希が泣いている理由…それはいつも決まって彼氏の事。結希の彼氏は浮気性だ。だから結希も大変なんだろう。

「結希～。そんなに泣くへりなら別れやえぱいこじやん

「絶対ムリーだつてめちゃめちゃ好きだもん…」

「…」がある度に今みたいな会話が繰り返された。

「…。ホントにこの子…」

結希とあたしは喫茶店を出で

「ばいばーい」  
と言つて別れた。

それからあたしは歩いて駅に向かつた。

今日はあの人いるかな

“あの人”つていうのは、今あたしがすぐ気になつてる人。たまにバスが一緒になる男の人だ。高2になつてからよく見かけるようになった。名前もわからないし、話したこともない。

ただ、あの日

彼を初めて見たときから、あたしは毎日彼のことを考えるようになつていた。

春のあつたかい陽の光がバスの窓から彼の茶色い髪を照らしていた。それはとてもキレイで、キラキラしていて、あたしは思わず見とれてしまつた。

10分もしない内に駅に着いた。

“彼”がいた。

## 彼の名前

彼は携帯をいじりながらバスが来るのを待っていた。あたしはさり気なく彼の斜め後ろに立つて横顔を見つめていた。彼と同じ時間に同じ空間にいることが出来るのが、何だかとても嬉しい、笑顔がこぼれそうなのを必死でこらえた。

大学生かなあ？専門学生かなあ？身長は170cmくらい？そんな勝手な彼への疑問が頭の中でどんどん作られていく。

知りたいなあ～この人の事。。。その時、

「洋輔【ようすけ】じゃん！」

と、ギターみたいなのを背負つた男の人が“彼”に近付いてきた。

「悠【ゆう】？！久しづびり～！」

彼が応える。

この人、洋輔って名前なんだあこえてくる。悠と呼ばれた人が

「お前彼女は？」

と聞いた。えつ！か、か、彼女？！

「ん？ いないよ。」

「いないんだ～良かつたあ。

「お前昔からそうだよな～。告られても絶対NO。折角モテるのにもつたといいよ」

モテるのかあ～…

「だつて別に好きな女の子とかいなかつたし」

「んな事言つちゃつて～。なあ～今から家来ない？すぐ近くだし」「いいよ。」

「そう言うと、彼と悠さんは駅を出て行つてしまつた。

あたしは帰りのバスに乗つてゐる時も、家に帰つた後も、彼の名前と

彼に彼女がない事を知ることができた喜びで、顔がゆるみっぱなしだった。（はたから見たらキモイと思つ。。）

だけど…心配な事がひとつ。彼 洋輔さんはモテる（らしこ）のに彼女を作らないみたい…。あたしが彼女になるのは相当難しことお～？！てか、ムリ？？？

ああ…なんか現実を突き付けられた感じ。

でもでも…今日は洋輔さんの声を聞けただけでかなり幸せだった

あたし、恋してるんだ。

## 初めてのお喋り

次の日、あたしはこの恋を結希に話すこととした。

結希とあたしは幼稚園の頃からの親友だ。結希は中学の時に引っ越してしまったけど、それからも一緒に遊んだりしていた。今では一番信頼できる相棒みたいな存在かな

放課後、あたし達はいつもの喫茶店でまつたり。

あたしは大好きなストロベリーパフェを頼んだ。結希は昨日と同じくチョコレートパフェ。

ガラスのテーブルに自分の顔が映っている。今日は少し頬がピンクがかっているような気がする。

「で、話って何何？」

結希がきりだした。

「あのねえ、、実は好きな人がいるのっ！」

「マジい？！」

それからあたしは、好きな人がバスでよく会つ人だとか、髪がすごくキレイだとか、時間も気にせず彼のことを語りまくった。

ちょっと遅くなっちゃったなあ

結希と別れて駅に向かう。

今日は洋輔さんに会えないかも…。会いたい。素直にそう思った。

その想いが届いたのか、駅に着くと、洋輔さんがいた。

やつたあー！神様ありがとうっ！！心中で思わず叫んだ。

駅のバス停には洋輔さんとあたしだけ。あたしはまた洋輔さんの斜め後ろに立つ。

この状況を結婚式に並ぶ為に携帯を取り出そうとした。

チャリーン

携帯と同じポケットに入れていた指輪を落としてしまった。指輪は洋輔さんの足元に転がっていく。

ヤバイー・ビツヒョウ。。。

するとい、

「はー、ビツモ」

あたしには恥しそうに笑顔でそう言つて、洋輔さんが拾ってくれた。

「あー、ありがとうござりますー。」

今にも飛び出でそう心臓のドキドキがバレないよ！って思つたけどこんなに取引つ繰り返したらもうバレだよね…。

洋輔さんは、テンパつてあたしを見て、あははって優しく笑つた。

「可愛いなあ

笑いながら洋輔さんが言つ。

「えつ？ー」

何言つてるんですか？ーーあなたの方がかつこ良過ぎですか？ーー

その後すぐにバスが来て、結局それ以外は何も話せなかつた。バスを降りてから、さつきの出来事を結希にメールで報告した。

『良かつたじゃん 一歩近付いたね!』

と返信が返つてきた。

あれは夢じゃないよね？一応頬をつねつてみた。現実なんだ、と確認する。

洋輔さんと話せた 嬉し過ぎて涙が出そつだよ。もう完全に恋の病にかかるてるね。

「可愛いなあ」

つて言つてくれた時のあの笑顔が頭の中に広がる。とても“好き”なんて言葉じゃ言い表わせないくらいスキ。どうしてこんなに好きなのか自分でもよくわからない。

ただ、愛しくて仕方がなかつた。

## ありがとう

今日は朝からルンルン気分で登校した。

教室では結希がにやにやしながら待っていた。

「藍梨ちゃん。今日は爽やかな笑顔で登校ですねえ」

「えへへー 洋輔さんのこと考えると顔がゆるんじゃうんだよね」

昨日少し喋つただけなのにもうすでに幸せボケしちゃつてます（笑）。あたしは学校あまり男子とは話さない。中学に入つてから、変な距離を置くようになつてしまつた。

だから男の人には免疫が無くて、昨日みたいな事になつたんだけど

「あたしも、嬉しいお知らせがあるのー実は今日、学校終わつたら彼氏とデートなんだ」

「仲直りしたん？」

「うんーなんか、あたしの勘違いだつたらしくて」

あ、そりですか。いつものことだから慣れてるけどさ。

結希達はなんだかんだ言つて1年以上付き合つている。あたしも洋輔さんと付き合えたらどんなに嬉しいことか。。。

幸せオーラを振りまきながら、学校での1日を過いだ。

放課後、今日もくるかな?と思つたけど、恋つてそんなに簡単に上

手くいくもんじゃないんだって、洋輔さんがいなバス停に教えられた。

いい事は毎日続かないんだよね…。

よし！明日があるもんね！大丈夫

1日でも君に会えないと、すつゝくさみしいよ。

早く明日にならないかなあ…

洋輔さんの事を考えながら、バスを降りてぼんやりと家まで歩いた。

玄関のドアを開けた瞬間、携帯のバイブが鳴った。

『ねえねえ！もしかして藍梨の好きな人って洋輔って名前？…』

結希からのメールだった。でも、どうして洋輔さんの名前知ってるんだろう？

あたしは

『そうだけど…なんで？…』

と返信した。

すぐにメールが返ってきた。

『那人、彼氏の友達なんだって！』

『ホントにあたしの好きな洋輔さんなの？』

『ホントだよ だって昨日藍梨が見た、ギター扱いでた男つてあたしの彼氏だもん』

『マジですか？！』

『うん！彼氏にその人の事色々聞いてみよっか？明日学校で会える  
よ』

『ありがと 明日楽しみにしてる』

結希、あんた最高の友達だよおー！！！

その日は結希に感謝しまくつて眠りについた。

次の日あたしは、結希が彼氏に借りててくれた高校の時の卒アルを見せてもらつた。

そこにはまだ髪が黒い洋輔さんが写っていた。

だけど、髪質は今と変わらない、柔らかそうな髪だった。

今まで知らなかつた洋輔さんがいるような気がして、わくわくしながらページをめくつた。

「あ。」

発見してしまつた。

「ん? ビーした?」

結希がアルバムを覗き込む。

あたしは、洋輔さんと知らない女の人が仲良しそうにピースをしている写真を指差した。

「何? ヤキモチ?」

結希がにやけながら言つた。

「うそ。」

「素直でよひしい。」

やつぱり、結希はあたしの頭をぽんぽんと撫でてくれた。

「でもアイツ、洋輔さんは彼女作つたことないって言つてたよ。」

アイツと会うのは結希の彼氏 悠也のことだ。

「それでもこんなに仲良く会っていると真見たら困る  
あたしは机に顔を伏せた。  
どうしてこんな小さい事でイヤになるんだろう？」これが恋つてモノ  
なのかな…

その日一日は少しブルーだった。

「何で些細なことを気にしてしまったのか  
どうしてこんなに嫌な気持ちになるのか

「何でこんなに好きになってしまったのか

なんだか解らないことだらけで一つと悩んでいた。  
帰り道、結希が突然、

「アイツに洋輔さんのアド聞いてみようか？」

「え。でも、いきなりの誰かもわかんない人からメール来たら  
キモくない？」

正直、すこしよく知りたかった。本心とは逆の事を言っていた。洋輔  
さんに迷惑だと思われるのがイヤだったから。

「そんな遠慮するなよ。大丈夫だつて！今アイツに聞いてみるか  
らか？」

そう言って結希は携帯を取り出してメールを打ち始めた。

この調子だと悠さんも、あたしが洋輔さんを好きだって知ってるんだろうな。

結希のバイブが鳴った。

「教えてもらひたよーメール送るか送らないかは藍梨次第だからさひ。アイツも藍梨のこと応援してたし、口かたいから洋輔さんにはバレる事はない」

「あひがどひー彼氏サンにもわひ伝えとこー」

「わひ致しまして。ウチら恋のキューピッドみたいじやん?ー」

それから結希と別れて、いつものように駅に向かった。  
駅には、あたしの大好きな人がいた。

あたしが近くに行こうとしたら、洋輔さんがこいつに気付いたらしく

「この前の高校生だひ

と書いていたズラっぽく笑った。

それって、も、もしかしてあたしのこと?..?

「えつ。あ、あの…」

あたしが慌ててこないと、

「アハハ また一緒にバスだね」

またあの爽やかな笑顔であたしに言いつ。

「そうですね」

緊張して一言しか言葉が出てこない。妙な笑顔になつていてるかもしない。

もつと話したかったのに、バスが来て会話は遮られた。

あんなに人懐っこいとは思わなかつたなあ。

帰つてからベッドに寝転がつてそんな事を思った。

もつと話してみたい。彼をもつと知りたい。

また一步近付けた ブルーだった気持ちが一気に吹き飛んだ。

ちなみにこの日、洋輔さんにメールを送らなかつた。勇気が出なくて。。。

## 彼の名前、あたしの名前

この前まで春のポカポカ陽気だったのが、今では夏の暑い陽が射している。

あれからあたしと洋輔さんは全くと言つてこいほど進展が無い。

ハア。いつになつたら近付ける日が来るんだろう？？

夏休み間近の教室の中は、ビタミンカラーみたいな派手な原色のカラフルな色で彩つたようになり、クラス全員が浮かれている。約1名以外は。

あたしは机に伏せてぼーっと窓の外を眺めていた。

「藍梨～。何つまんなそつな顔してんの～？」  
結希だ。

「だつてえー。あたしはみんなみたいにダーリングがいる訳じゃないし。夏休みになつても宿題に追われるだけの日々だもん」

「そんな悲しい事言つなよー。いつそのこと、例の彼に話しあげちゃえばいいじゃん？」

「そんなサラッと言わないで」

あたしだつて何回もそつとしたりしたけど、才前で勇気が無くなるんです！

「あんたはいつも事になるとホント消極的っていうか、マイナス

思考つていうか…」

結希が呆れたという顔であたしに言つ。

そんな事言われてもなあ。

最近洋輔さんを見かけないせいか、あたしはパワー不足で、目があらぬ方向を向いているのが自分でもよく分かる。

恋の病。重症です。

今日もいなんだろうな。

放課後、教室の掃除を終え、駅に行つた。

ん？…あつ！

いた！あの人ガ…喜びで飛び上がりそうだった。

今日「」を話し掛けでみよつ。「」のまま何も進まないのは良くないよね！

「あの…

「はい…」

嬉しい！覚えててくれたんだ。

「どうかしたの？」

「うう…」

「はい？…あつ。また会つたね！あの時の子でしょ？」

「あ、あの時、指輪拾つてくれてありがとう」

「うう…」

「うう…」

何とか理由を見つけてそう言つた、

「どう致しまして そんな大したことしてないのに って笑つてくれた。

その笑顔、素敵すぎます！

「名前、なんて言つの？」

「水野藍梨です！藍色の、藍、に、山梨の、梨、で藍梨！」

「へえ～。可愛い名前だね 僕は、相川洋輔って言つんだ。

相川って名字なんだあ～！名前までかつこ良く思える。

「あ。バス来たね」

洋輔さんはバスに乗ると、自分の席の前を指して

「ここ座る？」

と言つてくれた。

あたしは勿論そこに座つた。

バスの中で、悠さんがあたしの友達の彼氏だつてことや、洋輔さんは大学生つてこと、悠さんと洋輔さんは中学の頃からの友達つてこと、いろんな話をした。

楽しい時間はすぐに過ぎてしまつ。洋輔さんが降りるバス停に着いて、  
「バイバイ」と手を振つてくれた。  
あたしも  
「さよなら」

と手を振った。

思い切って話し掛けて良かった。  
自分で自分を讃めてあげたい。中学の時から男の人になんて自分が  
ら話し掛けたことなんて無かつたから。

家に帰つてからもドキドキしつぱなしで、その夜はなかなか眠れなかつた。

## 中学の頃の記憶 空クン

### 終業式

校長先生の長くて有り難いお話が終わり、2学期最後のホームルーム。

担任の先生から通知表を受け取る。あたしはかるいづじて赤点を免れた。

「水野一。どうだったー？」

後ろの席の日向空【ひゅうが そら】君だ。

「なんとか大丈夫だつたよ～。空君は？」

「俺も赤点は無かつたな」

「てか、空君はいつも成績いいでしょ～」

「そんな事ないって」

謙遜してるけど、この人は本当に頭がいい。クラスで中の下のあたしなんかじや到底相手にならない。

あたしと空君は、中学が一緒だつた。背が高くて頭も良くてバスケットの部長もやつていた空君はモテモテで、女の子に告られるのは日常茶飯事だつた。（勿論それは高校に入つた今も変わらない。）中3の頃の体育祭の日、あたしはケガをしてしまい、保健委員だつた空君に保健室まで付き添つてもらつたことがある。

「大丈夫か？」

「うん、まあ。」

男子に話し掛けられることがほとんど無かつたから、うまく話せな

かつた。

「水野つむりー、彼氏とかいるの？」

「えつ。いないよ、全然」

「そつか。良かった」

「？」

その時はそれで終わつたんだけど、後から結希に話したら、「それ藍梨の事好きって言つてるようなモンじやん」と言われた。

それから空君とはたまに喋る程度だつたし、告白もそれなかつたら、あたしは結希の言葉を気にしていなかつた。

自分のことを好きだなんて言つてくれる人がいるなら出会つてみたいよ…。

「藍梨つ。わつも口向君に話し掛けられてたね！」

ホームルーム後、結希がスキップしながらやつてきた。

「別に普通の話してただけじゃん」

「やつぱさー、あの子絶対藍梨が好きなんだつて！」

「そんな事はないと思います」

だつて、あの空君だよ？！あんなかつこいい、みんなの憧れの空君がまさかこんな凡人に恋するわけ無いでしょー！！

第一、あたしが好きなのは洋輔さんだもん

俺には、中学の時から気になる子がいる。

その子はいつも明るくて優しい子だった。奇跡的にも中1の頃から4年間同じクラスだ。

あの子は気付いてるかな？俺が昔から片想いしていること。

入学式で君を初めて見た時、俺は校長の話なんか全く耳に入らなくて、ただ君の横顔を見つめてた。

君が、君の友達の恋愛の為に一緒に泣いてあげるとこを見せて、君の優しさがまた好きになつた。

中3の体育祭。初めて君と話した日。君は気付かなかつたかもしけないけど、俺はずつとドキドキしてたんだ。俺は心臓の鼓動を抑えながら君に言った。

「水野つてさー、彼氏とかいるの？」

「えつ。いないよ、全然」

「そつか。良かつた」

最後の言葉で俺が好きってバレたかな？って思つたけど、そんな心配しなくて良かつたみたい。それもまた悲しいモンがあるんだけどね 実はちょっと（いや、かなり…？）鈍感だったりして。

中学では君を見るだけでドキドキだった。

今日、少しだけでも君と話せた事で、俺はまた君に元気をもらえたんだ。

俺がどんな女の子に告られてもOKしない理由は、 、  
君が好きだからなんだ。

最近、休み時間に、よく紺野結希と一人で男の話してるっぽいなあ  
。すぐ後ろの席だから聞きたくなくても耳に入ってくるんだよね。  
好きな人でも出来たのかな…？あーっ！ 考えだしたら止まんねー。  
気になってきた！！ どこの誰だか知らないけど、俺は4年前から片  
想い中なんだよ！

気持ちちは伝えなきゃ伝わらないんだよな。 よしつ！ 俺もそろそろ動  
き出さないといつ。

## 夏休み初日

夏休み。

あたしは初日からダラダラと宿題もせずに、寝転がってテレビを見ていた。

1

いきなり携帯が鳴った。結希からの電話だつた。

「もしもし」

「ハヤシナカ」画

あたしモヒタ過ぎて死にそーたか今かソ遊モー！」

「よし！決まり！今から1時間後駅で待ち合わせねっ」

学校よりも気合い入れてお化粧をして、お気の服を着て家を出た。

あたしが到着すると、結希がもう駅にいた。

「ねえねえ！あたし藍梨がとーつても喜ぶもの発見しちゃつたよ」

「あたしか喜ぶもの」?

ー ハン！ あれ見て

結希がホームの方を指差した。  
あたしは指差すほうを見た。

「……」

そこには洋輔さんがいた。

「ね！いいもの見つけたでしょっ？」

「うん！超感動！！」

洋輔さんの姿を見たらすうじく嬉しくなって、泣きそうだった。

「ちょっと、うるうるしちやつた？」

今にも泣きだしそうなあたしの顔を見て、結希が優しくそう言つた。  
「ヤバいよ。ホントに泣いちゃうかも」

何日も会つてないような気がした。夏休みは会えないと思ってたから、洋輔さんを見た瞬間、発作的に目に涙が溢れてきました。

「大丈夫？！藍梨はあの人のこと本当に好きなんだね」  
結希は優しく微笑んで、あたしの肩にポンと手を置いた。

「うん。大好き」

涙をぬぐいながらそう言つた。

「藍梨、あっち行こっ」

どこに行くかも特に決めていなかつたから、あたし達は洋輔さんがいるホームに行くことにした。

「洋輔さん」

「あーこの前の～、え～と…藍梨ちゃんだけ」

「そうです！良かつた、覚えててくれて。あの時話した悠さんの彼女つてこの子なんですよ」

「初めてまして！アーツの彼女の結希です」

「そ、うなん？！悠がお世話になつてますー」

洋輔さんが、悠さんの保護者みたいな口調で言つた。そのセリフに

あたしと結希は笑つてしまつた。

「アハハ！洋輔さん面白過ぎですよ～！」

とあたしが言つと、

「そう？そんなにウケた？」

つてとほけて言つた。

「洋輔さんはこれからどうこに行くんですか？」

「俺はこれから悠のとこ行くんだよー」

「アイツの家行くんですか？！」

「うん 二人とも一緒に行く？」

「えつと…」

あたしが戸惑つていたら結希が、

「はい！行きます行きます！」

と助けてくれた。

こうしてあたし達は当初の買い物に行くところの目的も忘れて、三人で悠さんの家に遊びに行くことになつた。

「え、つー何で三人もこるの?...」

悠さんは、洋輔さん以外にあたし達までくつついてきたので最初はす「」驚いてた。

でも洋輔さんが理由を説明すると、快く部屋に案内してくれた。

あたしは悠さんと会つのが初めてだつたから、軽く自己紹介した。悠さんは、結希にあたしのことを色々と聞いているらしい、あたしの座る位置を洋輔さんの隣にしてくれた。

そのお陰で心臓がバクバク音が鳴つて、体中が燃えてるみたいに熱かつた。

悠さんの部屋は、男の人にしてはとてもキレイに整理整頓されていて、モノトーンでまとめられていた。

あたしは男の人の部屋に入つたことがなかつたから、少しワクワクした。

「洋輔と藍梨ちゃんは知り合いなん?」  
と突然悠さんが聞いてきた。

「うん! もうかなり仲良しだよね~」  
洋輔さんがそう聞いてきたから

「はー! 超仲良しですよねえ」とあたしは答えた。

「メールとかもしてるので？」

「そーいやまだアド交換してなかつたね。聞いてもいい?」

「勿論OKです」

悠さんナイスです！！あたしが悠さんをチラッと見たら、洋輔さんに気付かれないように、結希と一緒に小さくピースしてた。あたしも小さいピースを一人に向けた。

アドレスを交換しあわると、

「おまえのやうな口上は、何うしても困る」

なんていい人たちなんだ。

なんていい人たちなんだ… 懲さんや絆君 洋輔さんといい こんないい人達に囲まれてあたしは幸せ者です。

」の口はみんなでたわいもない話をして終わつた。

アドレスを交換しただけで、あたしにとつてはすごい進歩だつた。あたしは洋輔さんのアドレス知つてたけど、なかなかメールを送る勇気が出なかつたから。

## 宿題と親友と。。。

あ～。どうしよう。

あたしがどうしてこんなに悩んでいるかといつと..

夏休みの宿題が何も終わっていないから。  
まだひとつも手を付けていない。夏休みもあと10日しかないって  
いつの間に。

あつ！こんなときは…

『結希～宿題手伝つて』

あたしは結希にメールを送つた。

『またあ～ま、いいよ。今から藍梨ん家行くね  
やつぱりあんたは良い親友だよ！』

「お邪魔しまーす」

結希だ！あたしは自分の部屋がある2階から階段をかけ下りた。  
「どうぞ～上がって」

それからじしばらべ結希とあたしは大量にたまっている宿題と戦つた。  
結果は見事に勝利。ほとんど結希が問題を解いてくれたんだけど。。。

宿題が片付いて、あたしと結希はジュースを飲みながらテレビを見ていた。

その時、

「藍梨さ～、洋輔さんとメールしてる？」

結希が突然、質問してきた。

「え」

あたしは動搖してそれしか言えなかつた。

「やつぱしてないかー。夏休みなんだから遊びに誘つてみれば？」

「うん」

それができれば苦労しないよ。結希みたいに可愛かつたら積極的に誘えるかも知んないけどさ。

「あやつて夏祭りじゃんー一緒に行けば？」

そつかーそんなものがあつたんだつけ。もうつー3年行つてないから忘れてた。

「洋輔さんOKしててくれるかなあ・・・」

「そんなのやつてみなきやわかんないじゃんつー」

結希はあたしを勇気づけてくれた。

「今日メールしなよ

「うん！頑張るー！」

結希が帰つてから、あたしは近くのクロシヨップに出掛けた。

あたしがCDを選んでいると、

「あれ？水野？」

とこの声が聞こえた。

聞き慣れた声だつたけど、誰だろ。あたしはその声がする方を見上げた。

「あーつー姫くんーー！」

## 帰り道

「水野つむりー、」

「何?」

「彼氏とかいんの?」

「えつー? しないけど…」

CDシヨップからの帰り道、空くんがそんなことを聞いてきたからすごくビックリした。

「そ、空くんは彼女いないの? ？」

「俺? いないよ。中学生時からずっと好きな子いるからさ」

「そーなのー? ジやあ、あたしの知ってる子だよねえー」

「うん。水野は絶対知ってる」

「誰だろお? ? 教えて?」

いくら考へても、空くんが好きな人の見当がつかなかつたから、空くんに直接聞いてみることにした。

「秘密」

「意地悪~」

あたしはほつべを膨らませた。

「そんなに知りたい？」

「知りたい！！」

「どーしようかなあ～」

「お願い……教えて？」

「……よし、分かった！」

「教えてくれるの？？」

「うん！てか水野可愛すぎなんだナビ」

「え？」

「教えて～って言つてる姿が」

空くんは笑いをこらえながらもいついつつた。

何言つてるの……空くん……やばい……顔が熱くなつてきた。恥ずかしくて俯いてしまひ。

空くんがあたしの顔を覗き込んだ。

「水野、顔赤いよ？」

「いやあ。だつて男の子に可愛いとか言われたことないし

「やっぱ水野つて可愛いね」

それ以上言わないで～。顔が林檎になる～。

「そうだ～! 空くんの好きな人の話してたんじやん! 誰なの?」

あたしは話をすり替えた。

「じゃあさ、教えてあげるから、あの公園でちょっと話さない?」

空くんは誰もいない近くの公園を指さした。

なんか公園で一人きりって緊張するなあ。

そう思いながらも、あたしは

「いいよ」

と返事をした。

あたし達は公園のブランコに腰を掛けた。

さつきまで暑い日差しが眩しかったのに、夕方になると陽も落ちて涼しい風が気持ち良かつた。

「俺さー、」

空くんが話し始めた。

「中1の時から今までずっとその子と同じクラスで、」

「つてことは高校も同じなのかなー。」

あたしは時折

「うん」

と相づちを打ちながら話を聞いた。

「まだわかんない？」

「えー？全然わかんない」

「そのヒントだけじゃわかんないよー。」

「水野のことだよ」

「え。どういう意味？」

まだあたしは状況が飲み込めていない。

「水野のことが好きなんだ」

「空くさんは優しく語った。

月明かりがあたし達を包む。長い沈黙。

驚いて声が出来なかつた。あの空くんがあたしのこと……？

「あたしは、ね、」

やつと声を出すことが出来た。

「空くさんのこと、本当に憧れてるし、優しく頼りになるし……大好きだよ」

「じやあ……」

「でもね」

あたしは空くさんの声を遮るまゝ語った。

「それは友達としてなんだ。」

「……やつか」

「！」あんね

「水野が謝ることないでー。」

空くんは笑顔であたしに語ってくれた。

「俺ふられちやつたけどこれからも友達でいてくれる？」

「当たり前じやん……」

「マジでーーありがとうーー水野の一番の友達になれるよーに頑張るからーー。」

それからあたし達は月明かりと街灯に照らされながら、一緒に帰り道を歩いていった。

「あ～あ。田向くん今頃泣いてるね」

「いや、大丈夫だつて！傷つけなによつに断つたもん！」

「いや～、女つて恐いわ～。可愛い顔してあつさり断るなんて。中学のときから片思いしてた子に振られたらへこむなあ～」

「うう…それ言われると痛い…」

あたしと結希は久しぶりに、学校帰りによく寄り道していた喫茶店“メイプル”に来ていた。

そこで昨日の出来事を結希に話したらこゝんなことになつてしまつた。

「冗談だつて 田向くんはモテるから大丈夫…！」

「やついつ問題？！」

「モーグー問題つ 」

あたしの質問を無視して結希はひとつで盛り上がりつづける。

「だつて藍梨には洋輔さんて言つ王子様がいるんだもんね

「うん…／＼」

「やついつめ、夏祭つの」と洋輔さんと言つた？

夏祭り……？なつまつり……。

あ  
！  
！

「ちよつと藍梨ちやん。あたし昨日ちやんと言つたよね?メールしなさいつて」「はー。」

呆れたという顔でこつちを見る結希。

「おひちよこちよこいつでいうかゾジツでいうか……。まあいいわ。今

ア川しな！

「今更に迷へザーの？」

「明日夏祭りがあるんですけど一緒に行きませんか？つて

「わかつた」

バッグの中から携帯を出して早速メールを打ち始めた。

『洋輔さん、お久です いきなりなんですけど、畠田ひかの近くで  
夏祭りがあるので良かつたら一緒に行きませんか?』

送信

「送信完了しました！」

「よくやつたー！」豪美にストロベリーパフェおどりあげる

「ホントだ?」やつたあ?」

「食べながら返信を待とう」

10分後。

着信音が鳴った。あたしはすぐに携帯を開いた。

「洋輔さんだつ！」

「で？ なんだつて？」

「『『夏祭りいいね！－緒に行こ』 『だつてえ～！－！』

「マジで？－良かつたじやん！－」

「うん！良かつたあ 嬉しい」

洋輔さんからの1通のメールだけでこんなに嬉しくなるなんて。。。あたし恋してるんだな～って実感した。

「結希達は夏祭り行かないの？」

「行くよ～ ねえねえ一人で浴衣着ていかない？」

「着ていいく！－！」

「よし決まり！－じゃあ駅で待ち合わせて、それからはそれぞれ別行動にしようか

「了解

あたしは洋輔さんに、結希は悠さんに、待ち合わせ場所をメールで報告して、二人を驚かせるために浴衣を着ていくことは内緒にして

おいた。

明日はいい日になつそうだ

## 夏祭り？

「なんだキドキするのは人生初かも知れない…。

今日は夏祭り当日。

つまり、あたしの勝負の日。（笑）

あれから結希と一緒に浴衣を買ってこの日に備えた。結希は黒地に白い花柄の浴衣。最初は、大人っぽ過ぎないかなあって言ってたけど、あたしは結希の綺麗な顔立ちにはすごく似合つていると思った。

あたしの方はと言つと…。結希が選んでくれたピンク地にパステルカラーの水玉の柄の浴衣。

あたしは結希と違つて見た目が子供っぽいからこうこう色しか似合わない…。そんな自分が情けなくなる。。。はあ

あたしのロングの黒髪を結希が器用にまとめてくれる。そこにかんざしををして、

「はい、完成！」

「あらがとう…！…結希は何にもしないの？」

「あたしは髪短いからこのまんまでいいの それより藍梨い、これで洋輔さんもメロメロだね」と結希は悪戯っぽく笑つた。

「あはははは…。そうだといいけど…。」

「ちょっと藍梨大丈夫？？？壊れ始めてない？…」

「不安と緊張でおかしくなつてる…。」

「大丈夫だよ！…藍梨めつちや可愛いもん…自信持つて もしか  
したら洋輔さんに告られたりするかもよ~」  
にんまりと笑う結希。

そんなことあるわけないって…でも本当にそつないだらいいな。  
なんて淡い期待を抱きながら、あたしと結希は待ち合わせの駅に向  
かつた。

やつぱり緊張する~。洋輔さん驚くかな

「お待たせ」

「二人とも浴衣だーー！」

悠さんか結希の声に気付いて手を振り返してくれる。

「お待たせしましたあーーー！」

あたしも走って人が立ているところへ行く。

「二二八」事件後，臺灣社會對殖民統治的批判，從此開始。

洋輔さんが一いつて笑つて言つた。

今  
·  
·  
·

洋輔さん

三三、たゞ

マジですか？！

すつごい嬉しいです！！笑<sup>〃</sup>

「どうしたの？」

だ。 固まつて放心状態のあたしに、心配そうに洋輔さんが顔を覗き込んだ。

「そお~。ならいこな~」。うねりもせわせの電車乗るっか」

「あ、はー！」

氣付けば隣にいたはずの詠希と悠せんはもうすでにいなかつた。」  
「いつの間に……？？？？」

## 電車の車内にて

電車の中はお祭りに行く人たちで満員で、結希達ともはぐれてしまつた。

そして今、あたしの状態はというと…。

近い！！

近頃忙です!!

あたしは電車のドアの前にいて、洋輔さんは向かい合わせであたしにかぶさるように立っている。

心臓バクバクです　ｗｗ

「藍梨ちゃん大丈夫？」

「はい／／／なんとか…」

本当はぜんぜん大丈夫なんかじゃないけど

恥ずかしそうに洋輔さんの皿を見れない。

「もうすぐ着くからそれまで頑張る」

「はい」

こんな近くで話すの正直照れるんですけどー（笑）

心臓の音が洋輔さんに聞こえなないように、一生懸命平常を装つた。だけど顔は茹でダコみたいに真っ赤だと毎回…

そんなこんなでやつと田的的に着いた。

妹だよ（前書き）

長い間休んで「みんなさー（。・因・・。）

## 好きだよ

お祭りの会場になつてゐる神社は、人々の熱氣と騒めきで溢れていた。

「混んでるなあ～」「  
「そうですねえ」

やつとお祭り会場に着いたあたし達は、人の多さに少し（かなり？）驚いていた。

「じゃあ行こつか

洋輔さんはあたしの手を握つてそつと言つた。

「はいッ／＼／＼

「手、嫌かな？」「  
「全然嫌じやないです！」

「そつか。良かつた」

あたし達はいくつも立ち並んでいる屋台の中を歩いていた。  
ヨーヨー釣りの屋台の前を通りかかったとき、可愛らしげにピンクの  
ヨーヨーが目に入った。  
あれ可愛いなあ～

「藍梨ちゃん何したい？」  
「え、えつと…」  
「俺ヨーヨー釣りしてもいい？」  
「えつ…あつ、はいっ」「  
「よしひー！」

やつぱり洋輔たこはまは回へりこ挑戦して、偶然にも、あたしが欲しがっていたピンクのパーパーを取った。

「やつとれたあ～」

「良かつたですねツ～」 「藍梨ちゃんがすゞぐく欲しそうだったから頑張つてみた～」

「えつ…？」

あたしのためにな…？

「藍梨ちゃんわかりやすいんだもん」

「すいぐ欲しそうだつたからねえ～」 「洋輔さんは笑いながらうつぱつた。

「つて」と、はーーー・フレゼント

「あ、ありがとひざこまわー！」

あたし達はそのあところんな屋台をまわって、夜遅くなってきたから帰ることにした。

行きと回り、回り満員の電車に揺られてあたしの家の方の駅に着いた。

「この時間だと終バスだね

「やつですね

…。

やつぱり…会話がなくなっちゃった…。

何か話せなきゃー

何か…

「藍梨りりちゃん」

「は、はーつ

「俺や」

「はー…？」

「好きだよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4961a/>

---

ストロベリーパフェ

2010年11月19日16時58分発行